

このほど、旧ソ連の科学者ジョレス(兄)と歴史家ロイ(弟)の双子のメドヴェージェフ兄弟が、満85歳記念に出版した「回想1925-2010」を共訳・解説し、現代思潮新社から刊行した。

本書は、旧ソ連内部からの仮借ない体制批判で知られた兄弟による、スターリンの收容所で死んだ父の追憶、人格と思想の形成過程、異論派研究者としての試練と苦闘、実に多様な作家や芸術家らとの交流の記憶など、日本では多くが本書で初めて明らかになる論考集である。往年の愛読者ならずとも、この「回想」により、この兄弟がどうして、スターリン時代から現在のブーチン時代まで、軸足のぶれない作品を世に問い続けることができたのか、その舞台裏を、垣間見ていただけるかと思われる。

### 收容所の父を鑑に

本書は第一部「幼年期と青年期」と第二部「ソ連邦から新生ロシアへ」と第三部「日本語版への補遺」からなる。第一部第一章「両親の思い出」では、労働赤軍軍政大学(国防大学)の哲学教授だった父

## メドヴェージェフ兄弟「回想」をめぐって

ささき・よう 42年静岡県生まれ。北大農學院修士課程修了。現在は札幌学院大総合研究所客員研究員。著書にロイ・メドヴェージェフとの共著「スターリンと日本」(現代思潮新社)、

の、收容所からの手紙が真に迫る。「君たちは有能であり、才能に長けた若者です。考えるため、自己規制のできる人物になるため、強い個性と意思を鍛えるために学びなさい。忍耐力と自制心、これらこそが特に君たちに必要なものです。たとえそれがいかに大きく見えようと、その困難に打ち勝つことを習得しな

の学ぶ生物学のような政治色のない分野に進むことをロイに囁く。だが当時、誠実な生物学者でいることは、単に難しいばかりか危険だった。エセ科学者ルイセンコがスターリンの権威を傘に学界を牛耳り、ジョレスの農科大でも遺伝学者らが弾圧さ

を含む異論派の民主化活動が世界に広く報じられていく。第2部は、多彩な作家や芸術家との交流や論評を通じたロイの同時代文芸の回顧となっている。1960年代にロイの交流相手で最初の大家となるシーモノフとの接点で、地下で回覧中のジョレスの「ルイセンコ学説の興亡」のタイプ原稿だった。以後、

# 圧制に抵抗揺るがぬ意志

さい」と記されている。

兄弟は、拷問に屈せず、虚偽の自白調書への署名を拒み通した父を鑑に、研究者の道を選んだ。ロイが大学の哲学部を志望すると、母は夫の二の舞いになるのを恐れ、兄

著「ルイセンコ学説の興亡」とロイが著した「歴史の審判にむけて(邦訳『共産主義とは何か』)」の海外公刊に踏み切ると、1970年、精神病院に収監されてしまう。以降、ジョレスを解放した闘いが

ロイの出会いは、エレンブルグやギンスブルグ、トリーフ、オノフ、トゥアルドフスキー、ロンム、ゲーンリその他に広がっていく。この多彩な顔ぶれとの交際は、兄弟の軸足のぶれないしなやかさと平仄が合う。

語り聞かせようと、はるばるロイを探し求め、訪ねてきたとある。実は、ジョレスの主要著作の「ルイセンコ学説の興亡」と「ウラルの核惨事」にも往時、名を明かせなかった協力者がいた。その一人が、第2部に元囚人で、ソルジェニツインの同僚体験者として登場する遺伝学者ティモフエーエフ・レソフスキーだった。

父にささげた代表作は、スターリン時代の犠牲者が双子の筆に託したミサ曲でもあった。ロイを通じソ連国内の作家に

伝わった。

### 犠牲者らへの鎮魂

第2部では他に、ロイがスターリン批判の記念碑的大作となる「歴史の審判にむけて」の執筆にあたり、古参党員らの証言に加え、どんな文献資料を駆使できたのかを明らかにしている。シーモノフやトリフォノフらの異論派が第一級の膨大なコレクションを惜しげもなくロイの回覧に供したことがわかる。

第1部でも、收容所の犠牲者と遺族らが、むごい経験を

## 回想

1925-2010

ロイ・メドヴェージェフ  
ロイ・メドヴェージェフ  
На Воспоминаниях



佐々木洋 訳 天野潤也 監訳

現代思潮